

公 開 講 演 会 要 旨

奈良・平安時代官人の服装—帯金具を中心にして— 奈良時代の官人が着用した腰帯の部品である銚帯金具をとりあげた。平城宮および各地出土の銅製銚帯金具は大小5型式が存在し、かつ各間には一定の比率が認められる。文献的には官位毎の差異を記すところはないが、この大小差が官位に準ずる規格とみられるので6位から無位までの5段階に比定した。また796年以降は銅を石に代えた石帯が行われるが、その際の規格も銅製銚帯の制を踏襲したことがあきらかである。官人の銚帯の実態を明確にすることによって、帯金具あるいは石銚帯を出土する墳墓、住居址、官衙遺跡などの再分析あるいは遺跡の性格づけをより具体的に捉えることが可能である。

(佐藤興治)

大和と山城を結ぶ交通路—平城京出土の告知札に関連して— 平城京東三坊大路東側溝跡から出土した告知札四点を手がかりに奈良・平安時代における大和と山背とを結ぶ交通路（いわゆる奈良坂越）について論述した。1）まず告知札は条坊等の人々の往来のはげしい交通の要衝に掲示し、牛馬などの拾得について周知徹底させる目的のものであった。2）大和平野における南北の官道として知られる上・中・下道の三道のうち、下ツ道は奈良時代になって平城宮で閉鎖されると、東にまわって現在の関西線沿いに奈良山を越え山背に通じた可能性がある。これは告知札発見の東三坊大路を北上するルートと一致する。3）このルート（山背—泉津—大和—不退寺—）を「御堂関白記」などの記録から裏付け、奈良・平安時代を通じて重要な奈良坂越えの一つであることを立証した。

(横田拓実)

古代の施釉陶器—奈良・平安時代に日本で作られた施釉陶器には、低火度鉛釉系の多彩釉陶器と緑釉陶器、高火度灰釉系の灰釉陶器がある。これらの施釉陶器の変遷を特に伴出遺物や文献記録によって年代の明らかなものを基に考察した。

多彩釉陶器のうち、年代の判明する最も古いものは神亀六年銘墓誌をもつ小治田安万呂墓出土の三彩小壺であり、最も新しいものは9世紀初頭の平城京東一坊大路側溝出土二彩陶片である。緑釉陶器では宝亀四年銘木簡と伴出した平城宮跡出土椀から、11世紀初頭の薬師寺出土の椀まで確実にあとづけることができる。

灰釉陶器は8世紀後半以後12世紀まで存続する。灰釉陶器の研究は詳細に進められているが、その年代についてはさらに古くする必要がある。また、灰釉陶器に対する中国製磁器の影響は小さく、鉛釉陶器からの影響の方がより大きく直接的である。

(高島忠平)

光明皇后と皇后宮職—光明立后にあたって設置された皇后宮職の組織について報告した。皇后宮職の組織は律令の規定や、続日本紀等正史の記載では不明な点が多いが、正倉院文書を整理検討することによって、その下級組織である淨清所・掃部所等の「所」の存在を多数確認することができた。詳細は研究論集Ⅱ所収「皇后宮職論」参照。

(鬼頭清明)